

研究報告

大学生の喫煙状況とストレスおよび喫煙関連要因の分析

神田清子¹⁾, 武居明美²⁾, 赤石三佐代²⁾, 狩野太郎¹⁾

¹⁾群馬大学医学部保健学科, ²⁾群馬大学大学院医学系研究科博士前期課程

要旨 本研究の目的は、大学生の喫煙状況とストレス反応得点との関係および喫煙に影響を及ぼす要因を明らかにすることである。対象は群馬大学に在学中の学生867名であり、質問票を配布し、同意の得られた学生737名に自己記述法により喫煙の有無やストレス度(SRS-18)の回答を得た。有効回答722名(男子学生188名, 女子学生534名)について分析を行い以下の結果が得られた。1. 男子の喫煙率は29.3%で女子7.3%より明らかに高率であった($p < 0.001$)。2. 性別, 年齢を調整した喫煙率は19歳以下男性15.2%, 女性3.1%, 20歳以上男性42.7%, 女性9.1%であり, 全国調査の結果よりも下回っていた。3. ロジスティック回帰分析の結果, 喫煙率に有意な影響を与えていた要因は性別・年齢($p < 0.001$), 専攻・健康増進法の認知($p < 0.05$)であった。ストレス得点とは有意な関係は認められなかった。喫煙率のオッズ比は男性が女性の6.6倍, 20歳以上が19歳以下より約4.6倍, 医療系学生が非医療系学生より2.1倍になることが明確になった。

これらのことから喫煙率を低下させるためには入学時直後からの予防教育や環境づくりが重要であること。また20歳以上の男子学生の禁煙支援プログラムづくり, 医療系学生の喫煙率の高い原因を追及することが急務であることが示唆された。

キーワード：喫煙率, 大学生, ストレス, ロジスティック回帰分析, 禁煙支援

はじめに

厚生労働省は2000年、「健康日本21」の計画目標を①喫煙が健康に及ぼす悪影響についての十分な知識の普及 ②未成年者の喫煙をなくす ③公共の場及び職場における分煙の徹底および効果の高い分煙に関する知識の普及 ④禁煙支援プログラムの普及を掲げ、禁煙に向けて医療従事者の役割が大きいことを明らかにした。また、2003年4月には健康増進法が制定され、学校、体育館、病院、官公庁施設、飲食店など多数の者が利用する施設管理者は、受動喫煙を防止するための措置を講ずるよう努めることが網羅された。当大学においても、大学の建物内や病院内での全面禁煙、分煙の徹底および学生・職員に対してのタバコに関する各種講演、禁煙外来などの開設な

どの動きが認められている。

これまでに喫煙に関する研究は数多く行われてきており¹⁻¹⁴⁾、効果的な禁煙サポートも展開されている。平成14年度厚生労働省国民栄養調査によると20歳以上の喫煙率は男性43.3%, 女性10.2%であり¹⁵⁾、わが国の男性喫煙率は先進工業国の中では最高値であり健康に与える影響が憂慮されている。また未成年(15~19歳)の喫煙率は男性19.0%, 女性4.3%になっており、未成年者の喫煙に対する問題もクローズアップされている¹⁶⁾。

大学生は、将来に向け健康な生活習慣を確立し、喫煙が習慣化しないように知識と行動を身につける大切な時期である。また著者はがん看護を専門としており、がん予防のためには身近な学生の禁煙や喫煙予防対策を講じることも大切な役割と考える。そこでまず当大学学生の喫煙率を明らかにし、喫煙とストレスおよび喫煙に及ぼす影響要因を分析し、対策を立てていきたい。

また健康増進法が制定され、禁煙に関する意識が高まりつつある中で大学生はこれらの法律を認知しているの

2004年11月8日受理

別刷請求先：神田清子 〒371-8514 群馬県前橋市昭和町3丁目39-15 群馬大学医学部保健学科

かどうか知ること重要である。

目 的

大学生の喫煙状況とストレス反応得点との関係および喫煙に影響を及ぼす要因を明らかにする。

言葉の定義

本研究における喫煙者とは「たばこを毎日あるいは時々吸っている者」、非喫煙者とは「以前喫煙していた者」「今までに一度も喫煙習慣がない者」とした。

研究方法

1. 対象者

研究対象者は、平成15年群馬大学に在学中の学生であり、所属は群馬大学医学部、工学部、社会情報および教育学部学生である。医学部保健学科学生は悉皆調査であり、他の学部は著者が行っている教養教育科目の受講生を対象とした。対象となる学生に研究参加について研究者または代理者が趣旨を説明した後、調査に協力を得た。この調査において、得られた情報の秘密は厳守すること、個人が特定されることはないこと、および調査に参加しなくても、何ら不利益をえないことを説明し自由意思により参加を求めた。

2. 調査時期と方法

調査は2003年11月から2004年2月に質問紙配票法により自己記述で調査した。

3. 調査内容と測定用具

質問紙の主な内容は、①一般的背景として性別、専攻、学年、年齢 ②喫煙の有無、喫煙の害の知識、タバコについての講義受講経験、健康増進法の認知について ③ストレス反応得点 (Stress Response Scare (SRS-18)) などである。

1) ストレス反応得点

鈴木ら¹⁷⁾が開発し、信頼性・妥当性が証明されている、Stress Response Scare (SRS-18) を使用。SRS-18は18項目から構成され、0-3点に配点、最低0点、最高54点である。「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」の3つの下位項目から構成され、それぞれ6項目で最低0

点、最高18点となる。項目数が少ないため、負担を少なくストレスを測ることが可能な尺度である。

2) 喫煙の害の知識

喫煙の害 (慢性閉塞性肺疾患、虚血性心疾患、がん罹患、受動喫煙者のがん罹患、妊娠に与える影響などについて7項目を「知っている、知らない」で尋ねた。6-7項目知っている者を「よく知っている」5項目知っている者を「知っている」4項目知っている者を「少し知っている」に分類した。

4. 分析方法

データの分析には、統計学的パッケージ SPSS を使用し、基本集計を行った後に、学生特性、男女別の喫煙状況、ストレス反応得点、喫煙に及ぼす影響を分析した。検定には χ^2 検定、フィッシャーの直接確立法、t 検定およびロジスティック解析を用いた。

結 果

1. 学生の特性 (表1)

学生867名に調査用紙を配布し、そのうち737名の回答 (回収率 85.0%) が得られた。回答が不十分なものを除去した722名 (分析率 83.3%) を有効回答とした。

性別は男性188名 (26.0%) 女性534名 (74.0%) であり、男性が女性の1/4であった。年齢は18~38歳 (平

表1 学生の特性

項 目	内 訳	人数 (%)
性 別	男 性	188 (26.0)
	女 性	534 (74.0)
年 齢	19 歳 以 下	254 (35.2)
	20 歳 以 上	468 (64.8)
学 年	1 年 生	270 (37.4)
	2 年 生	17 (23.7)
	3 年 生	147 (20.4)
	4 年 生	134 (18.6)
専 攻	医 療 系	635 (88.0)
	非 医 療 系	87 (12.0)
講 義 受 講	あ り	634 (87.8)
	な し	88 (12.2)
健康増進法	知っている	608 (84.2)
	知らない	114 (15.8)
タバコの害 知 識 度	少し知っている	222 (30.7)
	知っている	239 (33.1)
	良く知っている	261 (36.1)
全 体		722 (100)

均20.6歳，標準偏差（以下SDと示す）2.4歳），19歳以下が全体の1/3強であった．学年は1年生が全体の37.4%を占めていた．専攻は医療系学生88.0%で非医療系学生12.0%であった．タバコに関する講義の受講経験は学生の87.8%があったが，経験無しの学生が12.2%認められた．健康増進法を知っている学生は84.2%おり，タバコの害の知識は「良く知っている」36.1%であり，不十分な知識の学生もいた．

2. 喫煙状況（表2）

男子学生の喫煙率は29.3%で女子学生7.3%の約4倍であり，統計学的にも有意差が認められた（ $p < 0.001$ ）．

男性188名の喫煙状況を年齢，専攻，タバコについての講義受講経験，健康増進法の認知，喫煙の害の知識度毎にみると，年齢では19歳以下の学生は喫煙率15.2%であったが，20歳以上の学生のそれは42.7%であり明らかな差が認められた（ $p < 0.001$ ）．医療系と非医療系の専攻学生や講義受講経験の有無では有意な差は認められなかった．健康増進法を知っていると答えた学生の33.1%が喫煙をしていた．タバコの害の知識は，「よく知っている」学生でも35.5%が喫煙をしており，「知っている」よりも喫煙率が高くなっていた．

女性では年齢で有意な差が認められ，19歳以下の学生の喫煙率は3.1%，20歳以上は約3倍になっていた（ $p < 0.05$ ）．専攻では医療系の学生が非医療系の学生よりわずかに喫煙率が上回っていた．タバコの害は「良く知っ

ている」学生の喫煙率が高くなっていたが，統計学的な有意な差は認められなかった．

3. 喫煙とストレス反応得点との関係

学生のストレス反応得点は，合計で0～54点に分布し，平均15.6点であり，男子学生のストレス反応得点は平均15.6点，女子学生は15.8点で，女性の得点が少し高かったが，統計学的には有意な差はみられなかった（表3）．下位尺度の抑うつ・不安，無気力は男性が女性よりも僅かに低く，不機嫌・怒りは男性が女性よりも高くなっていたがいずれも有意な差ではなかった．

性別・年齢別・喫煙の有無別におけるストレス反応得点を表4に示した．男子学生の19歳以下における喫煙者のストレス反応得点は17.4点であり，非喫煙者の14.8点よりも約3点高かったが，両者の間には統計学的に有意な差は認められなかった．20歳以上では喫煙者と非喫煙者の得点は逆転しており，喫煙者の方が非喫煙者よりも低くなっていた．女子学生では19歳以下，20歳以上とも

表3 男女別のストレス反応得点

	男性 n=188.		女性 n=534		t 検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
抑うつ・不安	5.5	5.2	5.8	4.5	n.s.
不機嫌・怒り	4.4	4.4	4.1	3.8	n.s.
無気力	5.7	4.5	5.8	3.9	n.s.
ストレス得点	15.6	12.5	15.8	10.7	n.s.

表2 男女別の喫煙状況

項目	内 訳	男性 n=188				有意 確立	女性 n=534				有意 確率
		喫煙あり		喫煙なし			喫煙あり		喫煙なし		
		人数	%	人数	%		人数	%	人数	%	
年 齢	19 歳 以 下	14	15.2	78	84.8	0.001	5	3.1	157	96.9	0.05
	20 歳 以 上	41	42.7	55	57.3		34	9.1	338	90.9	
専 攻	医 療 系	36	29.8	85	70.2	n.s.	38	7.4	476	92.6	n.s.
	非医療系	19	28.4	48	71.6		1	5.0	19	95.0	
講義受講	あ り	46	29.1	112	70.9	n.s.	34	7.1	442	92.9	n.s.
	な し	9	30.0	21	70.0		5	8.6	53	91.4	
健康増進法	知っている	47	33.1	95	66.9	n.s.	36	7.7	430	92.3	n.s.
	知らない	8	17.4	38	82.6		3	4.4	65	95.6	
タバコの 害知識度	少し知っている	21	32.3	44	67.7	n.s.	6	3.8	151	96.2	n.s.
	知っている	12	19.7	49	80.3		13	7.3	165	92.7	
	良く知っている	22	35.5	40	64.5		20	10.1	179	89.9	
	全 体	55	29.3	133	70.7		39	7.3	95	92.7	0.001

表4 性別・年齢別・喫煙の有無別ストレス得点

性別	年齢	喫煙あり			喫煙なし			検定
		人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	
男性	19歳以下	14	17.4	13.8	78	14.8	11.9	n.s.
	20歳以上	41	14.5	13.0	55	17.1	12.7	n.s.
女性	19歳以下	5	22.8	5.6	157	16.6	10.8	n.s.
	20歳以上	34	16.1	10.9	338	15.2	10.7	n.s.

に喫煙者の方が非喫煙者よりも得点が高くなっていたが、いずれも有意な差は認められなかった。

4. 喫煙に影響するロジスティック回帰分析

学生の喫煙状況に影響すると思われる7要因をロジスティック回帰分析した。

ロジスティック回帰式は $\log p / 1 - p = 1.892 \times \text{性別(男性)} + 1.520 \times \text{年齢(20歳以上)} + 0.735 \times \text{専攻(医療系)} + 0.004 \times \text{ストレス反応得点} + 0.171 \times \text{講義受講経験(有り)} + 0.123 \times \text{タバコの害知識度} + 0.123 \times \text{健康増進法(有り)}$ が得られた。検定では χ^2 値86.285 (自由度7) $p < 0.001$ でありこの7要因は学生の喫煙状況予測に役立つことが明らかになった。喫煙とストレスとの関係は明確ではなく、性別、年齢 $p < 0.001$ 、専攻、健康増進法の認知 $p < 0.05$ とは有意な関係があった。喫煙率のオッズ比は男性が女性の6.6倍、20歳以上が19歳以下より約4.6倍、医療系学生が非医療系学生より2.1倍になることが明確になった。

表5 喫煙に影響するロジスティック回帰分析の結果

	ロジスティック 回帰係数	有意確率	オッズ比
性別(女性)	-1.892	0.000	0.151
年齢(20歳以上)	1.520	0.000	4.574
専攻(非医療系)	0.735	0.050	2.086
ストレス得点	0.004	0.663	1.004
タバコ講義受講(なし)	0.171	0.626	1.186
健康増進法(知らない)	-0.721	0.049	0.486
タバコの害知識度	0.123	0.191	1.131
定数	2.761	0.000	15.815

考 察

喫煙は喫煙者自身の扁平上皮がん、虚血性心疾患および慢性閉塞性肺疾患の発症・進行に関与していることは

従来から良く知られている。しかし喫煙者だけでなく受動喫煙を余儀なくされる非喫煙者の健康障害にも大きな影響を及ぼす。2003年4月、受動喫煙を防止するための健康増進法が制定され¹⁸⁾、当大学でも公共場所における全面禁煙対策が進んでいる。大学生は、将来に向けた健康な生活習慣を確立していく時期である。このような時期に大学生の喫煙率を明らかにし、喫煙とストレスおよび喫煙に及ぼす影響要因を分析し対策を立てることは重要である。

そこで本研究では大学生の喫煙状況とストレスおよびそれに影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的に研究を行った。その結果、学生の約85%は健康増進法の制定を知っており、特に喫煙者は大学でとられている対策のためか健康増進法の制定を知らない者はわずかに11%であった。しかしタバコに関する講義の受講経験がない学生が約12%存在していた。中学、高校では全学生、大学では選択科目で健康習慣、タバコの害に対する教育が行われている。しかし受け手である学生の認知がされていない現状が明らかにされた。タバコに関する知識についても「良く知っている」学生は全体の1/3強であり知識があるとは言えなかった。大井田ら¹⁹⁾や川根²⁰⁾は、看護学生の喫煙関連疾患に関する知識について調査したが、看護学生ですら肺癌や喉頭癌についての知識は高いが、他の部位の癌や循環器疾患での知識は低かったと報告していた。今回の調査でも同じような傾向があり大学においても知識の啓蒙が必要であることが示唆された。

喫煙率は男子学生29.3%で女子学生7.3%であった。ロジスティック回帰分析の結果では、喫煙率のオッズ比は男性が女性の6.6倍であり、大学生においても男性の禁煙対策がより重要であることが明らかにされた。

性別、年齢を調整した喫煙率は19歳以下男性15.2%、女性3.1%、20歳以上男性42.7%、女性9.1%であった。1999年に厚生労働省が実施した全国調査では、未成年男性19.0%、女性4.3%、20~29歳における喫煙率は、男性57.9%、女性23.2%であった²¹⁾。また平成14年厚生

労働省国民栄養調査結果では20～29歳における喫煙率は、男性53.3%、女性17.4%²²⁾であり、本大学の学生は19歳以下、20歳以上の男女ともに喫煙率は全国平均を下回っていた。

男女ともに明らかに法律的にタバコを吸える20歳以上と未成年者では喫煙率に大きな差が認められた(男性 $p < 0.001$, 女性 $p < 0.05$)。また、ロジスティック回帰分析においても、喫煙率のオッズ比は20歳以上の学生が19歳以下の学生より約4.6倍であり年齢は喫煙に歯止めをかけていることが明らかになった。大学在学中に20歳を迎える学生も多く、入学直後から20歳を迎えるまでの喫煙予防対策、健康に対する教育や環境づくりが重要であることが示唆された。また医療系学生が非医療系学生より喫煙率が2.1倍になることが明確になった。今回の調査では、ストレスが喫煙に結びつくことは予測できなかった。

医療系専攻の学生は将来保健医療分野で働くことが予測され、健康支援活動を促進する立場になり、自らがタバコの害に関する知識を持ち人々のモデルになることが期待されている。

しかしながら本調査結果では医療系専攻の学生の喫煙率が高くなっていった。これまでの医療従事者の喫煙率に関する研究では、医師は一般成人に比べ低い喫煙率であるのに対して、同じ医療従事者であっても看護師の喫煙率は世界的に一般成人に比べ高い傾向であることが報告されてきている²³⁻²⁵⁾。また、看護学生の喫煙率も同じ年代の大学生・短期大学生に比べると高い傾向にあることが報告されている²⁶⁻²⁸⁾。

今回の研究対象者は看護学専攻の学生が多いことから喫煙率が高くなっているのかもしれないが今回は医療系、非医療系で分類したので看護学専攻学生の喫煙率が他専攻と比べて当大学でも高いのかさらに詳しい分析が必要であると考えます。

いずれにしても生活習慣病やがん罹患を予防するためには20歳代での禁煙支援を徹底することが重要であり、20歳以上男性では全国調査は下回っているものの喫煙率42.7%であり、大学としてどう禁煙に向けた教育や支援システムづくりをしていくか課題である。特に男子学生への支援が必要であり、支援の第一歩は学生がまず「禁煙をしたい」という動機づけをもつことであると思われる。さいわいにも群馬大学では教養教育で健康関連の講義がたくさん開講されている。その中で、ディベートや禁煙に向けて学生同士がどのような支援ができるか

などを話し合う機会も重要であると考えます。

本研究は便宜的に集めたデータであり、群馬大学学生を代表としている無作為抽出標本ではなく偏りがあることは否定できない。しかしながら、20歳を境に喫煙率に差があり、大学入学直後から20歳を迎えるまでの予防教育や禁煙環境などの整備が求められていることが示唆された。

結 論

平成15年度群馬大学に在学中の学生867名を対象に、質問票を配布し、同意の得られた学生737名に自己記述法で喫煙の有無やタバコの害に関する知識およびストレス度(SRS-18)の回答を得た。有効回答722名(男子学生188名、女子学生534名)について分析を行い、以下の結果が得られた。

1. 男子学生の喫煙率は29.3%で女子学生7.3%より明らかに高率であった ($p < 0.001$)。
2. 性別、年齢を調整した喫煙率は19歳以下男性15.2%、女性3.1%、20歳以上男性42.7%、女性9.1%であり、全国調査よりいずれの値よりも下回っていた。
3. ロジスティック回帰分析の結果、喫煙率に有意な影響を与えていたのは性別・年齢 ($p < 0.001$)、専攻・健康増進法の認知 ($p < 0.05$) であった。ストレス得点とは有意な関係は認められなかった。喫煙率のオッズ比は男性が女性の6.6倍、20歳以上が19歳以下より約4.6倍、医療系学生が非医療系学生より2.1倍になることが明確になった。

これらのことから喫煙率をさらに低下させるためには入学直後から20歳を迎えるまでの予防教育や環境づくりが重要であること。また20歳以上の男子学生の禁煙支援プログラムづくり、医療系学生の喫煙率の高い原因を追究することが急務であることが示唆された。

謝 辞

本研究にご協力いただきました諸先生方、調査に御協力をいただきました学生の皆様に厚く御礼を申し上げます。

文 献

- 1) 大井田隆, 尾崎米厚, 望月友美子 他: 三重県における看護婦の喫煙行動に関する調査研究, 日衛誌, 53, 611-617, 1999.
- 2) 尾崎米厚, 木村博和, 蓑輪眞澄: わが国の中・高生の喫煙実態に関する全国調査(第2報) 生徒の喫煙に関連する要因, 日本公衆誌, 40, 959-968, 1993.
- 3) 奥村元子: 看護職とたばこ実態調査について, 日本看護協会, 45, 2002.
- 4) 河野由里, 三木明子, 川上憲人 他: 病院勤務看護婦における職業性ストレスと喫煙習慣に関する研究, 日本公衛誌, 49, 126-131, 2002.
- 5) Adriaanse, H., Reek, J., Zandbert, L., et al.: Nurses' smoking world wide. A review of 73 surveys on nurses' tobacco consumption in 21 countries in period 1959-1988, *Int. J. Nurs. Stud.*, 28, 361-375, 1991.
- 6) 桜井愛子, 大井田隆, 武村真治 他: わが国における看護学生, 保健婦学生, 助産婦学生の喫煙実態調査, 厚生 の 指 標, 50(6), 9-16, 2003.
- 7) 馬場みちえ, 嘉悦明彦, 長弘千恵 他: 女子看護学生を対象とした喫煙と自覚症状に関する横断調査, 九州大学医学部保健学紀要, 1, 51-58, 2003.
- 8) 緒方巧, 本多容子: 本学学生の喫煙実態と授業による喫煙・防煙教育の効果, 藍野学院紀要, 16, 64-72, 2002.
- 9) 村山より子, 久米美代子, 安東良恵 他: 看護女子短大生の喫煙に関する意識調査, 看護展望, 7, 103-107, 2002.
- 10) 斎藤智子, 山元智穂, 杉田収 他: 看護学生の喫煙行動及び喫煙に関する意識と喫煙防止教育のあり方, 新潟県立看護短期大学紀要, 8, 27-3, 2002.
- 11) Takashi, O., Kamei, A.M. & Shinji, T.: Smoking behavior and related factors among Japanese nursing students: a cohort study, *Preventive Medicine*, 32: 341-347, 2001.
- 12) 葛西敦子, 本間久美子, 花田久美子 他: 看護学生の喫煙と学習意欲・精神的健康との関連, 日本看護研究学会雑誌, 24(1): 67-75, 2001.
- 13) 矢島まさえ, 大野絢子, 秋山美加 他: 喫煙に対する意識と行動に関する調査研究, パース看護大紀要, 3(1), 13-21, 2001.
- 14) 関島香代子, 関奈緒, 鈴木宏: 国立大学看護教育機関における看護学生の喫煙行動と喫煙に関する意識, 新代医保紀要, 7(3), 321-325, 2001.
- 15) 健康・栄養情報研究会, 健康・栄養情報研究会編: 喫煙の状況(性・年齢階級別). 国民栄養の現状(平成14年度厚生労働省国民栄養調査結果), 118, 第一出版, 2004.
- 16) 厚生省: 平成10年度喫煙と健康問題に関する実態調査報告書, 222, 2000.
- 17) 鈴木伸一, 嶋田洋徳, 三浦正江 他: 新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18)の開発と信頼性・妥当性の検討, 行動医学研究, 4(1), 22-29, 1999.
- 18) 厚生統計協会: 2. 健康に関連する問題. 国民衛生の動向 厚生 の 指 標, 50, 81-83, 2003.
- 19) 大井田隆, 尾崎米厚, 岡田加奈子 他: 看護学生, 新人看護婦の喫煙行動関連要因, 学校保健研究, 40(4), 332-340, 1998.
- 20) 川根博司: 看護学生における喫煙の知識に関する調査, *The Japanese Red Cross Hiroshima Coll. Nurs.*, 1, 29-32, 2000.
- 21) 前掲載16)
- 22) 前掲載15)
- 23) 前掲載1)
- 24) 前掲載5)
- 25) 武田弘子, 佐藤浩昭, 高橋秀人 他: 医学生の喫煙習慣と事前教育における課題, 日本胸部臨床, 59(12), 913-920, 2000.
- 26) 前掲載12)
- 27) 前掲載13)
- 28) 前掲載14)

*Analysis of the relationship between smoking and stress,
related factors about smoking of undergraduate students*

Kiyoko Kanda¹⁾, Akemi Takei²⁾, Misayo Akaishi²⁾, and Taro Kanou¹⁾

¹⁾School of Health Sciences, and ²⁾Graduate School of Health Sciences, Gunma University, Gunma, Japan

Abstract The purposes of this study are to identify the relationship between smoking and stress, related factors about smoking of undergraduate students. Self-reporting questionnaire was given to 867 students with 732 replies (response rate of 85.0%). The effective response was obtained from 722 (effective rate of 83.3%) and their answers were analyzed.

1. The smoking prevalences of undergraduate students were 21.9 % male and 4.4% female student. A significant difference was male and female students ($p < 0.001$).
2. The smoking prevalence, 20 years-old and over was higher than less than 19 years-old, and a significant difference.
3. Sex, an age, major and knowledge of smoking influenced some thought as a result of logistic regression analysis which influences smoking.

Given the results of the survey, it is necessary to devise more effective methods of education to prevent from smoking, and education at the earliest possible time after their entry to university.

Key words : smoking prevalence, undergraduate students, stress, logistic regression analysis,
non-smoking support